

# 飴チヨコの天使

小川未明

青空文庫



青い、美しい空の下に、黒い煙の上がる、煙突の幾本か立った工場がありました。その工場の中では、餛チヨコを製造していました。製造された餛チヨコは、小さな箱の中に入れて、方々の町や、村や、また都会に向かつて送られるのであります。

ある日、車の上に、たくさんの餛チヨコの箱が積まれました。それは、工場から、長いうねうねとした道を揺られて、停車場へと運ばれ、そこからまた遠い、田舎の方へと送られるのであります。

餛チヨコの箱には、かわいらしい天使が描いてありました。この天使の運命は、ほんとうにいろいろでありました。あるものは、くずかごの中へ、ほかの紙くずなどといつしよに、破つて捨てられました。また、あるものは、ストーブの火の中に投げ入れられました。またあるものは、泥濘の道の上に捨てられました。なんといつても子供らは、箱の中に入っている、餛チヨコさえ食べればいいのです。そして、もう、空き箱などに用事がなかつたからであります。こうして、泥濘の中に捨てられた天使は、やがて、その上を重い荷車の轍で轢かれるのでした。

天使でありますから、たとえ破られても、焼かれても、また轆かれても、血の出るわけではなし、また痛いということもなかったのです。ただ、この地上にいる間は、おもしろいことと、悲しいことがあるばかりで、しまいには、魂は、みんな青い空へと飛んでいつてしまふのであります。

いま、車に乗せられて、うねうねとした長い道を、停車場の方へといった天使は、まことによく晴れわたった、青い空や、また木立や、建物の重なり合っているあたりの景色をながめて、独り言をしていました。

「あの黒い、煙の立っている建物は、飴チヨコの製造される工場だな。なんとい景色ではないか。遠くには海が見えるし、あちらにはにぎやかな街がある。おなじくものなら、俺は、あの街へいつてみたかった。きつと、おもしろいことや、おかしいことがあるだろう。それなのに、いま、俺は、停車場へいつてしまふ。汽車に乗せられて、遠いところへいつてしまふにちがいない。そうなれば、もう二度と、この都会へはこられないばかりか、この景色を見ることもできないのだ。」

天使は、このにぎやかな都会を見捨てて、遠く、あてもなくゆくのを悲しく思いました。けれど、まだ自分は、どんなところへゆくだろうかと考えると楽しみでもありません。

その日の昼ごろは、もう飴チヨコは、汽車に揺られていました。天使は、真つ暗な中にいて、いま汽車が、どこを通過しているかということはわかりませんでした。

そのとき、汽車は、野原や、また丘の下や、村はずれや、そして、大きな河にかかつている鉄橋の上などを渡って、ずんずんと東北の方に向かって走っていたのでした。

その日の晩方、あるさびしい、小さな駅に汽車が着くと、飴チヨコは、そこで降ろされました。そして汽車は、また暗くなりかかった、風の吹いている野原の方へ、ポツ、ポツと煙を吐いていってしまいました。

飴チヨコの天使は、これからどうなるだろうかと、半ば頼りないような、半ば楽しみのような気持ちでいました。すると、まもなく、幾百となく、飴チヨコのはいつている大きな箱は、その町の菓子屋へ運ばれていたのであります。

空が、曇っていたせいもありますが、町の中は、日が暮れてからは、あまり人通りもありませんでした。天使は、こんなさびしい町の中で、幾日もじつとして、これから長い間、こうしているのかしらん。もし、そうなら退屈でたまらないと思いました。

幾百となく、飴チヨコの箱に描いてある天使は、それぞれ違った空想にふけていたのであります。なかには、早く青い空へ上ってゆきたいと思っていたものもあります。

が、また、どうなるか最後の運命まで見てから、空へ帰りたいたいと思っ  
ていたものもあり  
ます。

ここに話をしますのは、それらの多くの天使の中の一人であるのはいうま  
でもありません。

ある日、男が箱車を引いて菓子屋の店頭にやってきました。そして、飴チ  
ヨコを  
三十ばかり、ほかのお菓子といっしょに箱車の中に収めました。

天使は、また、これからどこへかゆくのだと思いました。いったい、どこへ  
ゆくのだろ  
う？箱車の中にはいつている天使は、やはり、暗がりについて、ただ車が石の上  
をガタガ  
タと躍りながら、なんでものどかな、田舎道を、引かれてゆく音しか聞くこ  
とができ  
ませんでした。

箱車を引いてゆく男は、途中で、だれかと道づれになったようです。

「いいお天気ですのう。」

「だんだん、のどかになりますだ。」

「このお天気で、みんな雪が消えてしまっただろうな。」

「おまえさんは、どこまでゆかしやる。」

「あちらの村へ、お菓子を卸しにゆくだ。今年になつて、はじめて東京から荷がついたから。」

飴チヨコの天使は、この話によつて、この辺には、まだどころどころ田や、圃に、雪が残つていゝことを知りました。

村に入ると、木立の上に、小鳥がチユン、チユンといゝ声を出して、枝から、枝へと飛んではさえずつていました。子供らの遊んでゐる声が聞こえました。そのうちに車は、ガタリといつて止まりました。

このとき、飴チヨコの天使は、村へきたのだと思ひました。やがて箱車のふたが開いて、男ははたして飴チヨコを取り出して、村の小さな駄菓子屋の店頭に置きました。また、ほかにもいろいろのお菓子を並べたのです。

駄菓子屋のおかみさんは、飴チヨコを手に取りあげながら、

「これは、みんな十銭の飴チヨコなんだね。五銭のがあつたら、そちらをおくんなさい。この辺りでは、十銭のなんか、なかなか売れつこはないから。」

といひました。

「十銭のばかりなんですがね。そんなら、三つ四つ置いてゆきましようか。」と、車を引

いてきた若い男はいいました。

「そんなら、三つばかり置いていってください。」と、おかみさんはいいました。

飴チョコは、三つだけ、この店に置かれることとなりました。おかみさんは、三つの飴チョコを大きなガラスのびんの中にいれて、それを外から見えるようなところに飾っておきました。

若い男は、車を引いて帰ってゆきました。これから、またほかの村へ、まわったのかもしれません。同じ工場で造られた飴チョコは、同じ汽車に乗って、ついここまで運命をいっしょにしてきたのだが、これからは知らない場所に別かれてしまわなければなりませんでした。もはや、この世の中では、それらの天使は、たがいに顔を見合わすようなことはおそらくありません。いつか、青い空に上って行って、おたがいにこの世の中で経てきた運命について、語り合う日よりほかになかったのであります。

びんの中から、天使は、家の前に流れている小さな川をながめました。水の上を、日の光がきらきら照らしていました。やがて日は暮れました。田舎の夜はまだ寒く、そして、寂しかった。しかし夜が明けると、小鳥が例の木立にきてさえずりました。その日もいい天気でした。あちらの山あたりはかすんでいます。子供らは、お菓子屋の前まで

いました。このとき、飴あめチヨコの天使てんしは、あの子供こどもらは、飴あめチヨコを買かつて、自分じぶんをあの小川おがわに流ながしてくれたら、自分じぶんは水みずのゆくままに、あちらの遠とほいかすみだった山やま々の間あいだを流ながれてゆくものを空想くうそうしたのであります。

しかし、おかみさんが、いつかいったように、百姓しやうの子供こどもらは、十銭せんの飴あめチヨコを買かうことができませんでした。

夏なつになると、つばめが飛とんできました。そして、そのかわいらしい姿すがたをおがわ水みずの面おもてに写うつしました。また暑い日あつ ひどか盛りごろ、旅たび人が店頭みせさきにきて休やすみました。そして、四方よもはなしの話はなしなどをしました。しかし、その間あいだだれも飴あめチヨコを買かうものがありませんでした。だから、天使てんしは空そらへ上のぼることも、またここからほかへ旅たびをすることもできませんでした。月日つきひがたつにつれて、ガラスのびんはしぜん汚よごれ、また、ちりがかかったりしました。飴あめチヨコは、憂鬱ゆううつな日ひを送おくつたのであります。

やがてまた、寒さむさに向むかいました。そして、冬ふゆになると、雪ゆきはちらちらと降ふつてきました。天使てんしは田舎いなかの生せい活かつに飽あきてしまいました。しかし、どうすることもできませんでした。ちようど、この店みせにきてから、一年ねんめになった、ある日ひのことでありました。

菓子屋かしやの店頭みせさきに、一人ひとりのおばあさんが立たっていました。

「なにか、孫まごに送おくつてやりたいのだが、いいお菓子かしはありませんか。」と、おばあさんはいいました。

「ご隠居いんきよさん、ここには上等じょうとうのお菓子かしはありません。飴チヨコならありますが、いかがですか。」と、菓子屋かしやのおかみさんは答こたえました。

「飴チヨコを見みせておくれ。」と、つえをついた、黒い頭巾くろずきんをかぶった、おばあさんはいきました。

「どちらへ、お送おくりになるのですか。」

「東京とうきょうの孫まごに、もちを送おくつてやるついでに、なにかお菓子かしを入れてやろうと思おもつてな。」と、おばあさんは答こたえました。

「しかし、ご隠居いんきよさん、この飴チヨコは、東京とうきょうからきたのです。」

「なんだっていい、こちらの志こころざしだからな。その飴チヨコをおくれ。」といって、おばあさんは、飴チヨコを三つとも買かつてしまいました。

天使てんしは思おもいがけなく、ふたたび、東京とうきょうへ帰かえつていかれることを喜よろこびました。

あくる日ひの夜よは、はや、暗くらい貨物列車かもつれつしやの中なかに揺ゆすられて、いつかきた時分じぶんの同おなじ線路せんろを、都と会かいをさして走はしつていたのであります。

夜が明けて、あかるくなると、汽車は、都会の停車場に着きました。

そして、その日の昼過ぎには、小包は宛名の家へ配達されました。

「田舎から、小包がきたよ。」と、子供たちは、大きな声を出して喜び、躍り上がりました。

「なにがきたのだろうね。きつとおもちだろうよ。」と、母親は、小包の縄を解いて、箱のふたを開けました。すると、はたして、それは、田舎でついたもちでありました。その中に、三つの飴チョコがはいつていました。

「まあ、おばあさんが、おまえたちに、わざわざ買ってくださいったのだよ。」と、母親は、三人の子供に一つずつ飴チョコを分けて与えました。

「なあんだ、飴チョコか。」と、子供らは、口ではいったものの喜んで、それをば手に持つて、家の外へ遊びに出ました。

まだ、寒い、早春の黄昏方でありました。往來の上では、子供らが、鬼ごっこをして遊んでいました。三人の子供らは、いつしか飴チョコを箱から出して食べたり、そばを離れずについている、白犬のポチに投げてやったりしていました。その中に、まっ

たく箱はこの中なかが空からになると、一人ひとりは空箱からばこを溝どぶの中なかに捨すてました。一人ひとりは、破やぶつてしまいました。一人ひとりは、それをポチに投なげると、犬いぬは、それをくわえて、あたりを飛とびまわつていました。

空そらの色いろは、ほんとうに、青あおい、なつかしい色いろをしていました。いろいろの花はなが咲さくには、まだ早はやかったけれど、梅うめの花はなは、もう香かおつていました。この静しずかな黄昏たそがれがた、三人にんの天使てんしは、青あおい空そらの上のぼってゆきました。

その中うちの一人ひとりは、思おもい出だしたように、遠とほく都会とかいのかなたの空そらをながめました。たくさんえんとつの煙突えんとつから、黒くろい煙けむりがあがっていて、どれが昔むかし、自分じぶんたちの飴あめ子こヨコが製せい造ぞうされた工こ場じょうであつたかよくわかりませんでした。ただ、美うつくしい燈ひが、あちらこちらに、もやの中なかからかすんでいました。

青あお黒くろい空そらは、だんだん上あがるにつれて明あかるくなりました。そして、行ゆく手てには、美うつくしい星ほしが光ひかつていました。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「赤い鳥」

1923（大正12）年3月

※表題は底本では、「飴《あめ》チヨコの天使《てんし》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 飴チョコの天使

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>